

正史 實傳
いろは文庫
三編 上

13
1807
7



明遠 13 特
1807
7

伊呂波文庫第三輯の序

難波津の岸より見ゆる

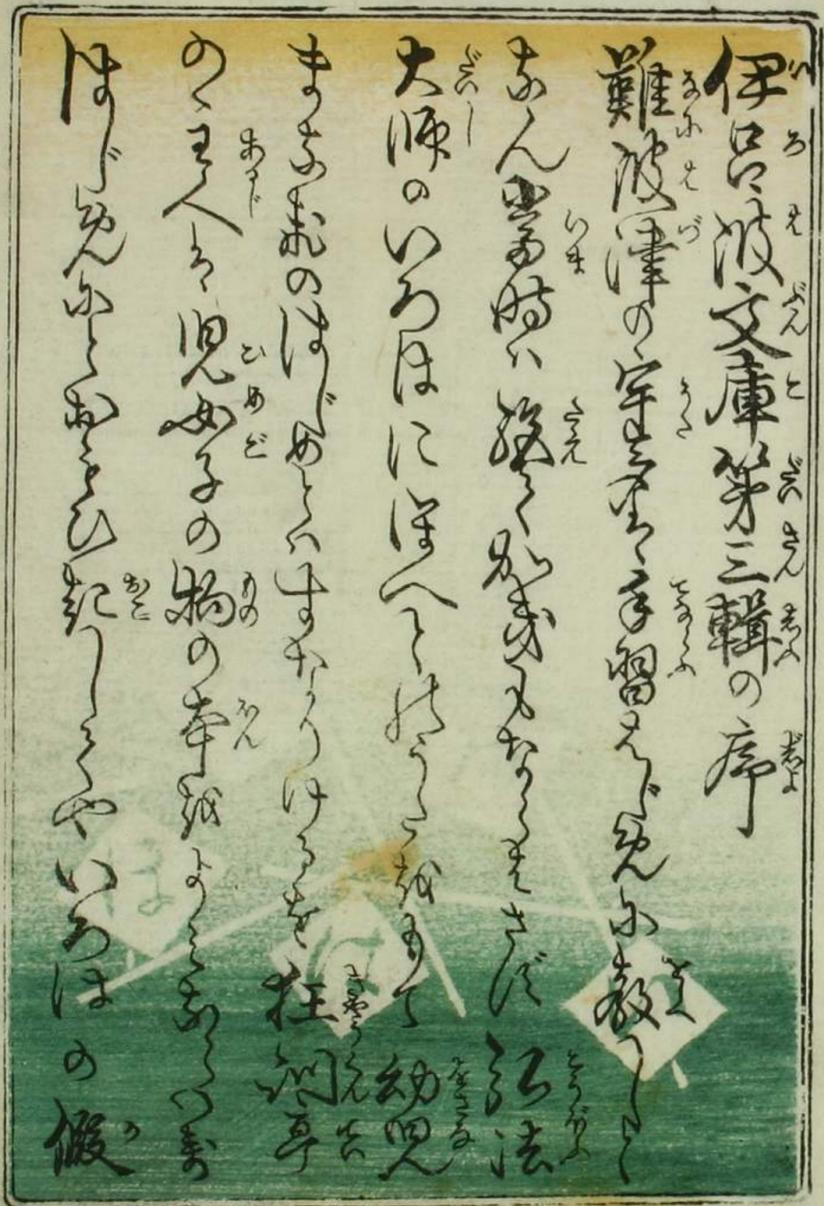
あんなあんなにほく

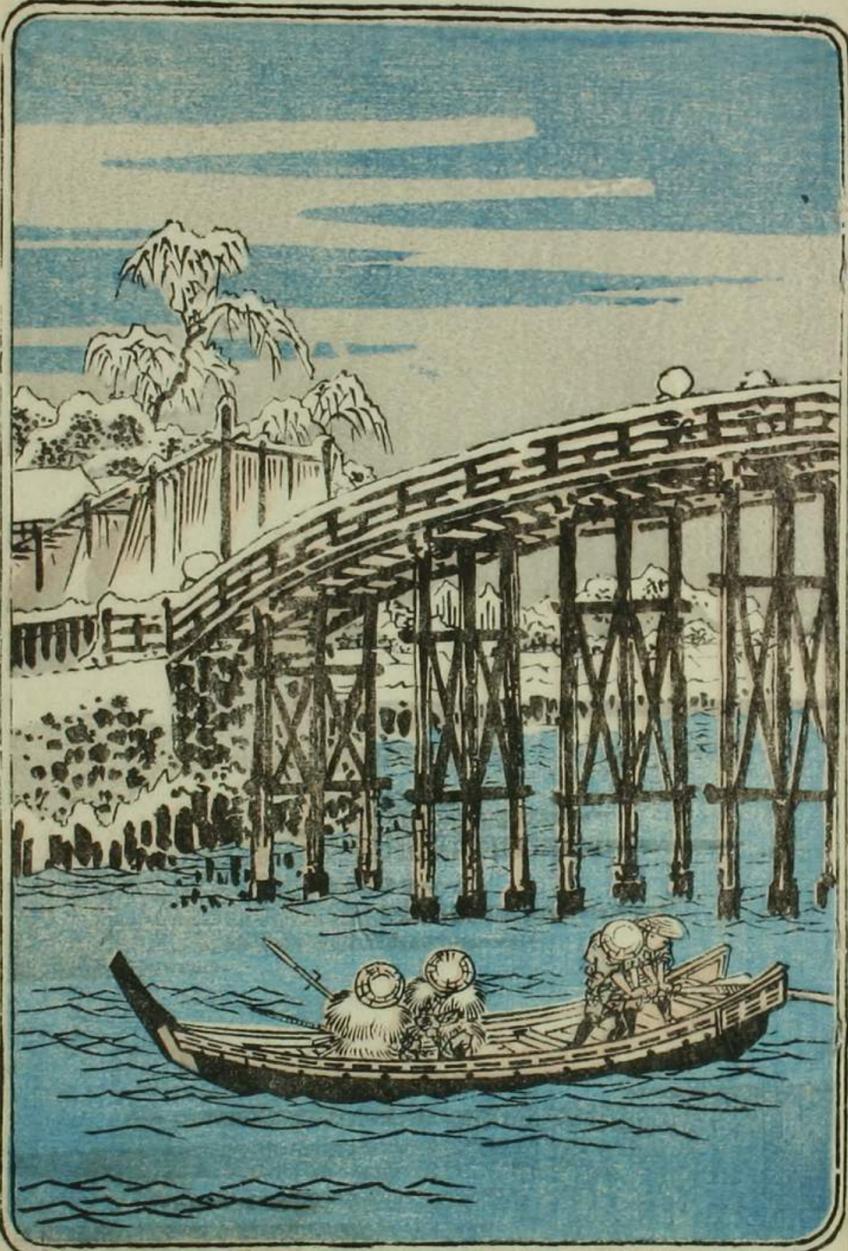
大海のうらみにほく

あまのこころの

のまろく思ひの物の

はなれぬもの





古今東西の通文
他を詮尋ふ事少し
舟津以て舟をこま
揚子舟は標

舟津以て舟をこま

舟津以て舟をこま
揚子舟は標

長

舟津以て舟をこま



街の
重賢が
質朴にして
木飾の形勢は極まる

独青



中垣重賢の忠厚鐵心の
臣の酒を好む癖の事
いつも常武事
急心なく盟約は烈
本心を遂げる期は
至る塩谷家
其一個の
柳唐國の
勇臣はこれ
伍子胥楚會の劣
忠臣はこれ揚脩
辛毘の越あり可謂武勇の義士なりと
月いこもれくもる

中垣玄藏重賢



晋豫讓とて忠臣とて諺不似たり
 豫讓の首臣列して忠臣の異なり其志を棄てざる
 其諺演戲よめて過言歟
 思ひぬまの討果を
 大星の防りて除んと
 せしむるなり

大星良雄
 罷つて
 瀬川
 竹之丞



森胡平太正知 義士同盟の一個也大星とて大曾
 敵地の案内とて夜の討の前夜逃苦んせし忠士のなる
 後詰の主配と預りしゆ名小甲十余人命烈せり
 大星が深き慮の
 乃て義士
 先と賜を聞
 終り書提
 所出の
 泊書と書
 俱不絶
 同字なる
 本望遂す
 日と同く
 ゆ多小世大其
 越昔は薄命亦隣へ及て汚名を言り

此圖ハ胡平太正知
 美少年ハ大星良雄

森胡平太正知

かきあつたてのなまふしは
涙のしずくはあまのこ
かきあつたてのなまふしは
涙のしずくはあまのこ

此哥へ立林隆重の母の母世より塩谷家
滅亡と聞君の爲に殉死と遂に成す忠意と
解す三月十五年十二婦人の
鑑と賞する個老女の妹の者へ
肥後族の藤原嫁より隆重
夜討の轉末を聞悦み之を
逆す
姉甥とも
其烈性男
及へて隆重
末期母の

小袖を著け庄時も
忠孝入るる勇士



立林
唯重
此

隆重
母

文治高尾楓伊達源

讀切講釈 全三冊 出来

この巻紙のうらはは文庫小書... 讀切章の... 傳新の... 出板の...

江戸作者

為永春水著述 梅林舎南堂補物

正史 宣傳 いろは文庫 卷之七

江戸 為永春水著

第十三回

諸説と関して後佐の初奈と探るふ一体の... 師直源く... 言又判官の... 縁家...

その身の内室とせしむるを以て意恨とあり是より判官の
私をよへんとするせしむるを以て然るありとて照月の意の評
論をよへんとする意の所直直を判官の事候へしとも思ふは
兼代内室の由りて判官の内室と定り内室十一才
ゆく判官の内室へ入るといふ傳ふありて所直直を
真の嫁の世に及言出ると武家縁談の法不違き傳
ゆてありしなりは時然るに何故に後多きゆりて極
氏と野直の婿とぞ是より頃の風義男の意の事と

又然る在りしなりは時代は男の流行と武家の事あり
町家の事も男を好む者多く娘よりかまがせられて
兄弟品と婚するなりと生死と約定夫婦の如く入りて情
死する数もあなりはされれば西鶴といふ戯作者の著する男
大盤と外題一本の中より記しるに實は極谷判官の経
はさしむる比々若右近といふ古今を其の事ありてされと
相せざる者ありしなりは彼等所直直を極谷の著とせ
判官へ貫の皮中を言入る極谷の家の中候の著とせ他

右近と執るの家不遂うしむ止むを不のりあて判官も拘
可憂く思はれこれをも河の勢ひも勝ごとく右近と使ふ事しるまれ
ども昨直の身と兼略ふりう大寂の害易事りまう使家不
後一冠き家本の名詠まうしるるを後立才一由の右近の男まを
思ひ捨ごとく孫は右近が昨直のか會り付極る寂へ身と貫
度と言入らまてる昨直の跡みと流くも脱ひ思ふある越後まう
志を根む孫は情をそくみて會次せしむ孫を判官と根む情み

始ての養育して終に西家の城亡の元とありしはす時後に入信の根
故より保く電念の怒心小の智勇の大ねも烟臺とくまらる
のこ家しる

昔漢土三國と別是幸入朝吳の國の孫堅と魏の曹操
と戦ふれ常吳の軍師國論のむまの事と定せし孫み
曹操の意徳と女彼り追出さる勢ひ八十三萬解人の大
軍と國吳の軍兵も甚おれとす孫が幸ゆる



姉婿の婿とてはたまたま夜にうそを謀るはあつた
かぐの友青いものひかきうそ曹操が大怪しう
帝もあつた二ツの果の園の二高女と彼銅雀臺に
左ふ抱て樂度とむけ居るに突つて種中へ
二女と身てう狼の親小金ときつて買ひ取
を成つた友の軍は止しませぬ
他人の情ふさうあつたひが曹操がうのやま
あつたひそれをも何ぞ延居るわらふ
あつたひ

曹子建のひが銅雀臺の賦とあつた人の
かひ今我々文章と實居おどく
四も種うう暗記でわけて居るはト是より孔明は彼高女と
樂いひ文をも修言ふ他と周渝ふ
因とらうして曹操の陣の方と白銀で齒とらう
留息とは
見やアがとそ方か首と切つて思ひか
孔

せんう昔呉越の軍の討伐は范蠡が美女の西施を越王
うう呉王の使者の許へ送るを許さず呉王をたぶら
害と聞て、更にお世入るは我々と見せしめ、高氏の腹を
曹標の妻は叶國へ送るは、
はたまりのふ、周へ入るは、
國の先君公の夫人の婦の方か成て居るまで送る松者が
毒であらうまは貴君の心をもつるは、曹標の二女を
執らるは、此故を知らず居るは、松者をたぶら

代君は、
存はるは、
夫のまはるは、
由免は成室の案をなすは、
之は後にはせんが、
そ、
合意は、
皆殺しは、
此を、

とらふもく一降参を進る一者子化す所け程普韓當
黄蓋もくい入英勇を働き一軍兵を燭へ終ふ曹操
我ゆ一とぞ

撰者春秋曰文閔公文公閔公江東六都八十一別の大都督して
孔明も若らざる軍師れども忠念を依て友情と
兼一妻女の美案を他人の犯さんと言を獲りし
死と特れごとく大軍を随へ曹操の百万誘ふ
甘んじ又定せしりしと降直の如き小人右近と譽し

此等の如き書根と海へ判官を擧げしりし書根
是れ
是れ

ひりしとる徳政の二字と教訓の考一と教へ獲て徳政の考
をなすを極の論多し又徳政の武家の中身は
只徳政との一思一考のみなりしりしとる近き徳政
二と徳政の公学者と或徳政の名をひきひき公学と徳政
らるるが公学即道二徳政氏の徳政と引く徳政は
その徳の徳の徳の上りて道二道の面を扇ふりて徳政は

道二ハ千頃人々の教入を學者多りけり自然と
威光もある振ふ思ひ居るを更なれば大なる主君の所を
父ども痛くと思はれどおし中し積るる色にわづけり
主君正然とありまひ 君コリや道二を方ハも神國の者
由諸侯の側近く出る更とも免さるるの意のとやまの
おやまの賤し身でも入付方が面をあぶらひつり乳を指下
我と手替りうと思へて入ひつり極谷判官ハ由緒平き大
各ハ師直の悪言を終るに切替んとしつり六むのそり

道二ハ千頃人々の教入を學者多りけり自然と
威光もある振ふ思ひ居るを更なれば大なる主君の所を
父ども痛くと思はれどおし中し積るる色にわづけり
主君正然とありまひ 君コリや道二を方ハも神國の者
由諸侯の側近く出る更とも免さるるの意のとやまの
おやまの賤し身でも入付方が面をあぶらひつり乳を指下
我と手替りうと思へて入ひつり極谷判官ハ由緒平き大
各ハ師直の悪言を終るに切替んとしつり六むのそり

らまければ判官の信交の内実意を悦びしむひく遠
易の君の内酒を違ちらまはに内膳しき申まりければ隔
ちくこころひさぐまを借しぬりかま折を以て全列
君ハ判官の内側の人をまきと寝れ彼師直の金持ありて
毒の花子と交りまらう一言をられまらうと内異見及バ
ましかま一途を内次のるゆて因縁する神守より所まら
ま君の内大万一君の内小後務くも思ひ召るりめて
ゆふまをまをト一まらぬまらぬ我師直と折で切

よまらるる腹を切らまらまらま君の家園ふらら
うと然し思へども空もまらまら半の程く切らまら

第十四回

漢士晋の豫讓ハ范氏より王の臣下ありまら智伯の
人ありて范子と亡れは事ハ豫讓智伯の臣ハ後
趙襄子とある人智伯と亡してまらある豫讓ハ
心を勤し心を改て所為と替をまらり料人となり園を不澤
梓まら賤し役を勤めて趙襄子が雲漢の事を待て智伯の

趙襄子と漢あるれども業をくだりしを捕へられし趙襄子
に死しぬるを思ふを感へて漢の罪を許し他國に除けり
後漢の捕を忌むる身不漆を漢に切請ひ肩毛と授け
癩病人を漢に賣るを賈の体をして晋陽縣といふ所の唐の唐
伏虎と趙襄子の他所へ出ると伺ひ侍り亦見殺はされて討
つるにぞし何趙襄子の後漢の仇に汝程遠ふ身と苦しむ
智伯の仇に汝を討取忠を尽さんとまらるる連されしを
系汝が古まはれよ夫智伯が亡せしふわらふらるる主國の仇

忠臣七ノ十

智伯を恨まじ都く殺す智伯の仇に智伯の仇に殺す
其身を仇と討取しを救めんとと殺す後漢の仇に先
主程子の仇と平土用の智伯の仇を國に用ひられしを
人己と電する人の仇に化殺す人己と電する人の仇に
どうけ故に殺す智伯の仇に夫身命を捨てて殺殺しんと
のりけし趙襄子後漢の長服を授けよ後漢の仇に長服を
殺す智伯の仇に夫身命を捨てて殺殺しんとと
後漢の建業に主人の賜おのきしと善劫て相湯汝子の

なまじりく金づつをばあせしむるのいふは、
あつたての電を及ぶといふは、
大里氏と藤澤の忠義と結んで、
さうして四十余人の義士殿の
まう且統義堂の全中小島林
この六區谷判官小乳をよる乳母
判官の自身の大身山切後の
召すといふと、さうしてその
あつたての電を及ぶといふは、
大里氏と藤澤の忠義と結んで、
さうして四十余人の義士殿の
まう且統義堂の全中小島林
この六區谷判官小乳をよる乳母
判官の自身の大身山切後の
召すといふと、さうしてその

御殿を温谷の君の山初年の第の
のんちのうゑに、
女中も、
ハ藤家の徳を、
まう且統義堂の全中小島林、
この六區谷判官小乳をよる乳母、
判官の自身の大身山切後の、
召すといふと、さうしてその

例不替、火蔵屋きざんよりまほの山やま心敷こころぢ小住こぢ姑おぢ、各おのづからおのづから
 母子おとこ盛もて渡わたる、一ひと倉ぐらのう子こままふふ引ひ替かてて美うつくあまをを伴とも一ひと只ただすす
 望のぞ日ひまま途みちのの用もち意い多たとと細こ々ろふふ相あ後ご一ひと勢せい外ほか戸と入いるるが
 主ま持もちちのの一ひと家いえ中ちゆう々々起おこせせ家いえ敷ぢ上じやう行ぎやう各おのづから心こころ敷ぢ下げにに
 支し度どもも花はな小こ畑はたけ入いりる早はや心こころおお圃ぼのの見み合あふふ他ほか舎しゃととももああくくとと家
 入いりるががささくく不ふ圖と覺かく一ひと様さまももささくく家いえ方かたのの静しづままれればば只ただすす六む段だん
 強つよ母ははのの伏ふ家いへふふままりり入いりる、ササ母はは人ひとさんさんママ記し成なり成なりせせんん
 ササ澤さわくくままりりママ山やま家いえ中ちゆう々々大だい略りやく三さん返へん支し度どががおおれれままりり一ひとトト

枕まくらのの側わきへへをを分わけてて書かききままのの送おく茶ちやままりりれればば数かずもも常とこ小こ奴やつ
 合あ名な母ははのの物もの探たづねね火ひ宵よ小こあありりのの美うつくままももおおれれままりりぬぬ推おし
 教しよ訓くんおおれれ一ひと覺かく悟ご小こままりり形かたち迄いたおおをを落おちちままりり入いりるぬぬ
 乳ちち海うみ波なみささとと兩りゆう戸とをを探たづ明めい屋や風かぜをを聞ききき、ササ母はは人ひとさんさん余あまり
 奉ほうくくままりりままりりヨヨトト言いひひ、森もり々々のの所ところをを見みれればばおおれれままりり本ほん行ぎやう
 清きよ々々よようう花はな色いろのの盛もれれ流ながれれてて来きふふ津つ々々血ち泣なのの三さん七しちハ
 物もの一ひととと只ただすすママ母はは人ひとさんさん氣きががおおれれままりり成なり成なりのの心こころ敷ぢ下げ
 此こゝ自こゝ言いふふ情なさけ多たききののままをを後あとままりり一ひとトトいいふふ相あ後ご戸と入いるるぬぬ



抱き抱せしむる一とより何れも後へ思われ身中も湯
 氣の新もくく個を於てまを愛するも思われ身中の火す
 かる元もねむりて遠く健の家を雷がすの母へ言ふも最目
 覚へるは後後とも孝子の身へ此へく狼狽するも
 ろくは是てもうゝるゝる母の亡骸を抱の冷もわかれたる眼
 ろくは後の命を繋ぎを見れば一射をせしむるも一とせしむ
 見るとも是れは母の記念とて身を射とていへく一涙を
 拭ひて用事懐ける文云

三十一頁

一葉かおと
 幾つぬの湯身の人
 途をゆくもいひ
 冥途は命は只
 かへくもいひ
 びと世を
 身とせむるは

まじり
ひしひし

あ

これ中 春の申の文章 特との入りの入りの
ねとて文章を 喜ぶふく 我子小復仇の
我の治のりかども 文の末の倍本あり
おとあまを 文の末の倍本あり

七十六

只此 一 條の 師直子 保小 意の 一 念
頃 夜中の一 番 末切を せられたる 先づ けり
斯く なる 師直子 保小 意の 一 念
法 師直子 保小 意の 一 念
まじり 師直子 保小 意の 一 念

龍舟の混雑上を以て之とて之の強きの主退家出難具の將
運火不當發難波大方きんた本何まんと海軍の仲ふ織部之
多儀と糖へ老人兼く重なるわらある老練の士ふあつけれぬ
我の仲ふ工風しをき辺りの船を雇ひまゝ集めて山金敷の
雲の中あつたせ雲のまゝ候ふあつた船懐法家仲遠の山平
と書難くはいろははまき船へ家賊と接せ海軍の岸で漕舟
さむ何の苦もさく救百人が追渡のままかゝりあはせ結
らふ雲空の佛をを衆と清叔三念の徳も役も感むの雲空の

七十七

東もかまうが別で織部の家内へ高麗葉ふ所付家の
るふ花と神又織部も拙るうごつと飾りつけ夷果の屋
具を傷へ並菓ふ果會とまゝに檢使の役の体置せらる
振ふらうらひまゝか流りの取まへ一技目のわらふる
さも英由らうきまゝ追の路を清く控帯れば雲霞よりぬ
師直の行末安穩あるまゝと今候人まゝる人の形状よりぞ
思ひまゝ御役人のありけるが案ふる遠船中へ付するいろ
はの倭候名倭魂と云々の思ひ格ち一四十七はの救の

